の二階に上がらせてもらったこともある。

往事茫々の感があるが、人と文献の交差点での出来事は、どれを取っても人生上の貴重な思い出である。経済資料協議会の終焉まで、生きて遭遇出来たことを良しとしたいものである。係わったすべての方々に感謝の言葉を捧げたい。

思い出すままに

鈴　木　よ志子
(元アジア経済研究所図書館)

私が直接「経済資料協議会」と関わりを持つようになったのは職場の担当課に配属されてからである。職場独自の雑誌記事索引の作成と重なる部分もあったが、「経済学文献季報」は経済学の分野では、なんといっても多機関の共同作業ということと編集の確かさで内容も幅と厚みがあり、信頼性を得ていた。1980年代後半、一時休刊の時期から復刊についてのご苦労は先輩からよく聞かされていたものだ。現実に実務として、自分が担当するまでは、見学会などの行事に参加するだけで、協議会そのものには、あまり関心はなかった。諸先輩が理事機関としての役割を果たしていたので、その後任ということで理事になったりして、何年間かお世話になった。私が参加する以前は休刊問題と同時に、国立大学などでは行政改革の影響で図書館専門担当者の異動などとも関わって、会員機関が減少して、会員拡大に苦労されていたようだ。共同作業と組織の持続は永遠の課題だ。その後、1990年代後半に入り、官民問わず、ますますこのような共同作業的事業がやりにくくなってきたのだ。物事を起こすときの努力と引き際の辛さ・困難さは別問題であるが、いよいよ2008年10月で解散とのこと、本当に皆様お疲れさまでした。

総会や研究会で会員機関を訪問したり、採録者仲間と交流することは、楽しくまたいろいろ学べたし、自分の職場を見直すこともできた。それぞれの職場環境の変化で、採録や職場外へ出向く時間がとれないなど、余裕がなくなったことも、会員機関の減少の要因になっていて、ネットですべてがすまされるわけはないと思う。人間のネットワーク構築の機会が減っているのである。

総会に、はじめて参加したのは、福島大学だった。「松川事件」の裁判資料に携わっておられた先生の講演や松川資料室、事件現場見学など“その時歴史が動いた”ではないけれど、今も印象に残っている。経済学と直接関係なくて、出張報告に困ったのは大阪市立大学の某先生の講演「百人一首の秘密・・・」(?)であった。また、龍谷大学深草校舎での総会後、事務局長の案内で京都へ戻り、秀吉がここでわらじを脱いだという店で鱧でなく鰻雑炊を食した。とてもおいしかった。だが、その後、「もう1回行こう。」と言うのは誰からも聞いていない。総会・理事会の後、京都ではよく鴨川沿いの鰻の寝床のような店の奥の離れで、みんなで気勢をあげたのも懐かしい。鰻ついでにもう一つ、東経大での会議の後、連れて行ってもらった串焼き屋で、貴重な肝串をパクパク食してしまい、鞏蹙を買ったのも苦い思い出である。また、会議後の私的懇談が発展して、「勝手にインド図書館見学団?」が実践されたのは楽しい思い出であった。

今年、「研究者のためのアメリカ国立公文書館徹底ガイド」が出版された。“利用方法や資料管理システムの理解は万全。12年間の経験を駆使して解説された本邦初のNARA 攻略本”と帯に書いてある。何だか私もワシントンへ行きたくなってしまう様な書籍である。アーカイブスには、アーキビストが必要である。図書館には図書館員・・・。そういえば、「図書館員のための経済学講座」というのを諸先生にご協力いただいて連続開催した。それぞれの大学の貴重書を特別に直接閲覧しながら、解説していただいた。どなたか、まとめて下さると有難い、なんて今さら無責任ですよね。

久しぶりに経済資料協議会のホームページを覗いて見ました。懐かしい皆様のこれからのご活躍をお祈りします。